



中峠式土器



加曾利E I式土器



加曾利E II式土器



加曾利E III式土器



なかげしきどき ちばけんまつどしなかげしき
中峠式土器—千葉県松戸市中峠

貝塚出土の土器がもとになって名づけられています。縄文がつけられています。また、そのうえから粘土の紐を貼りつけたり、細い溝をひいて、直線や曲線を描いています。

加曾利E I・E II・E III式土器—千葉県千葉市加曾利貝塚E地点出土の土器をもとにして呼ばれています。一般に、ふくらみかけた朝顔のような、キャリバー形深鉢とよばれる形が多いようです。文様は縄文や撚糸文、他にクシ状のもので細かな線を引いた条線文をつけ、口の近くには粘土を貼りつけ渦状や波状に飾りつけた文様が多いようです。また、いったんつけた縄文を部分的に磨り消したような文様もみられます。

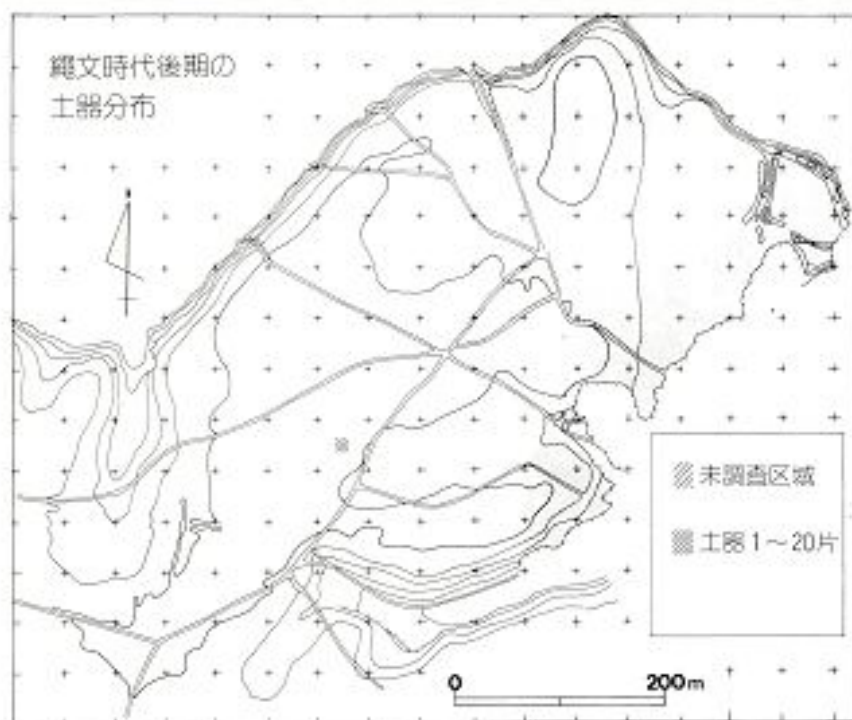
これらの土器を使用していた時期、特に加曾利E IIからE III式のころの竪穴住居址が確認されています。(川端弘士)

土器の文様のつけ方 (3)

縄文



縄文時代後期の土器 (3,000~4,000年前)



縄文時代後期は、加曾利貝塚に代表される大きな貝塚が東京湾ぞいにたくさん形成されていた時期です。

和良比遺跡の近くでは、北側の谷をへだてた台地に後期の土器を出土する貝塚があります。(和良比向井貝塚)

ここでは、土器一片だけの発見でした。



加曾利BI式土器



加曾利BI式土器—千葉県千葉市加曾利貝塚B地点から出土した土器をもとにして名づけられました。それほど大きな土器ではありません。縄文をつけて、その上から縄文を消してつけた帯状の文様が特徴です。(川端弘士)

土器をつくろう！





和良比遺跡では、土器以外にも様々な縄文時代の生活用具が出土しています。それらを使って、当時の人々のくらしの様子を考えてみましょう。



D7-b19

まのせふ
磨製石斧

石をみがいてつくられた斧。柄をつけて、木を切ったり、削ったりするのに使われたようです。



E7-d1

どかい
土錐

魚とり網のはしにつけて、おもりとして使われたもの。土器の破片が利用され、ひもかけ用のきざみがつけています。



第1号住居址



E7-c25 D5-a1

珧状耳飾 土製

中央にきざみめをいれた
耳飾。耳たぶに穴をあけ
てはめこんだようです。



第1号住居址

カキの貝からつくられたもの。
腕飾りとして使われました。



貝刃

貝からの縁にうちかいて
刃をつけたもの。魚のう
ろこをとるのに使われた
ものとされています。

第1号住居址

刃の痕子

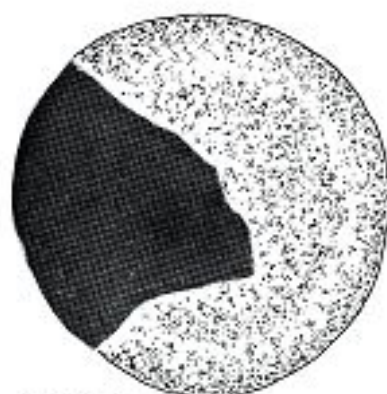




E7-c4

だせいせき
打製石斧

礫のはしをうちかいて
刃をつくった石器。名
前とはちが。て、土を
掘るのに使われたよう
です。



E6-a19

いし
石皿

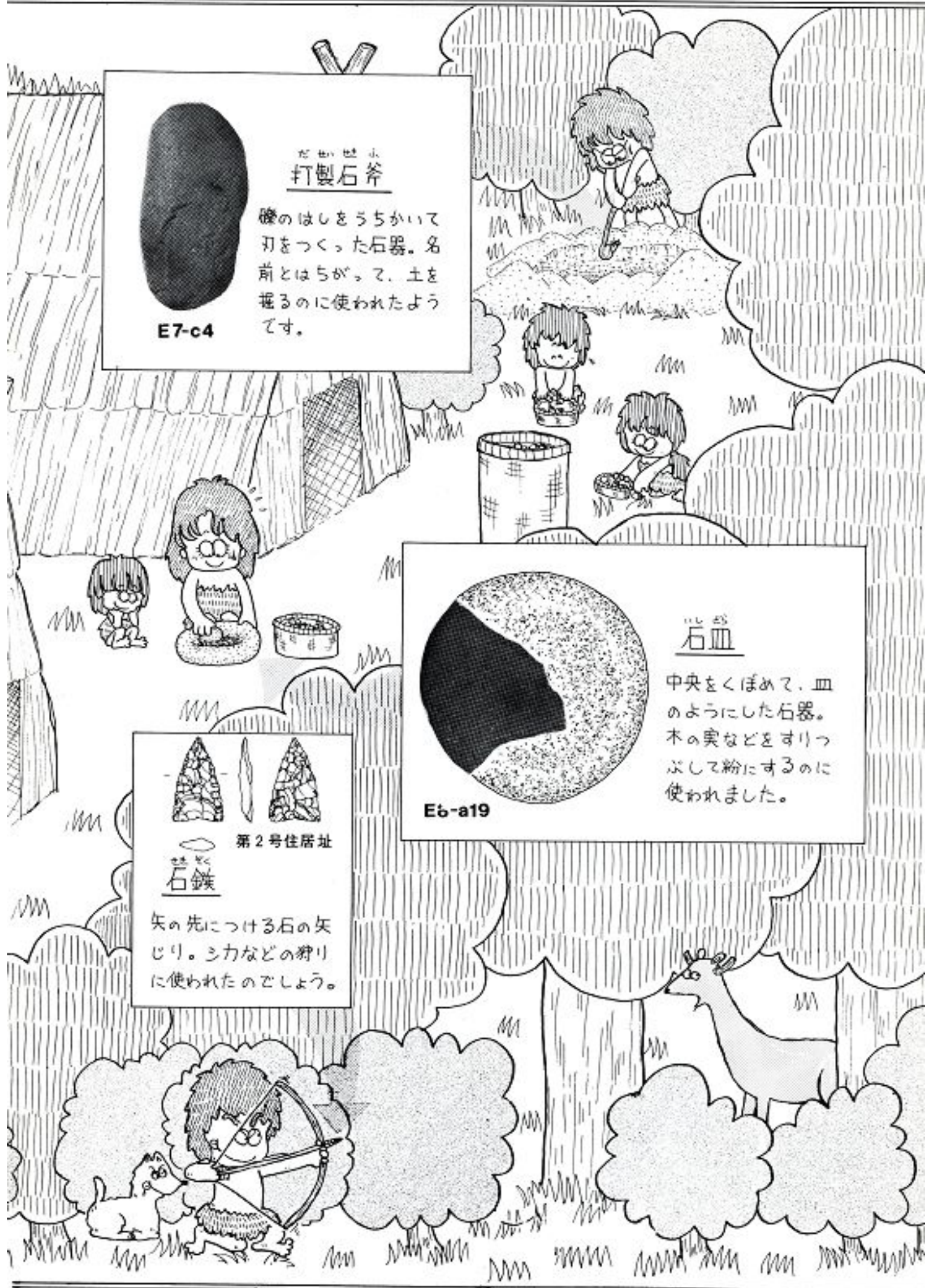
中央をくぼめて、皿
のようにした石器。
木の实などをすりつ
ぶして粉にするのに
使われました。



第2号住居址

いし
石鏃

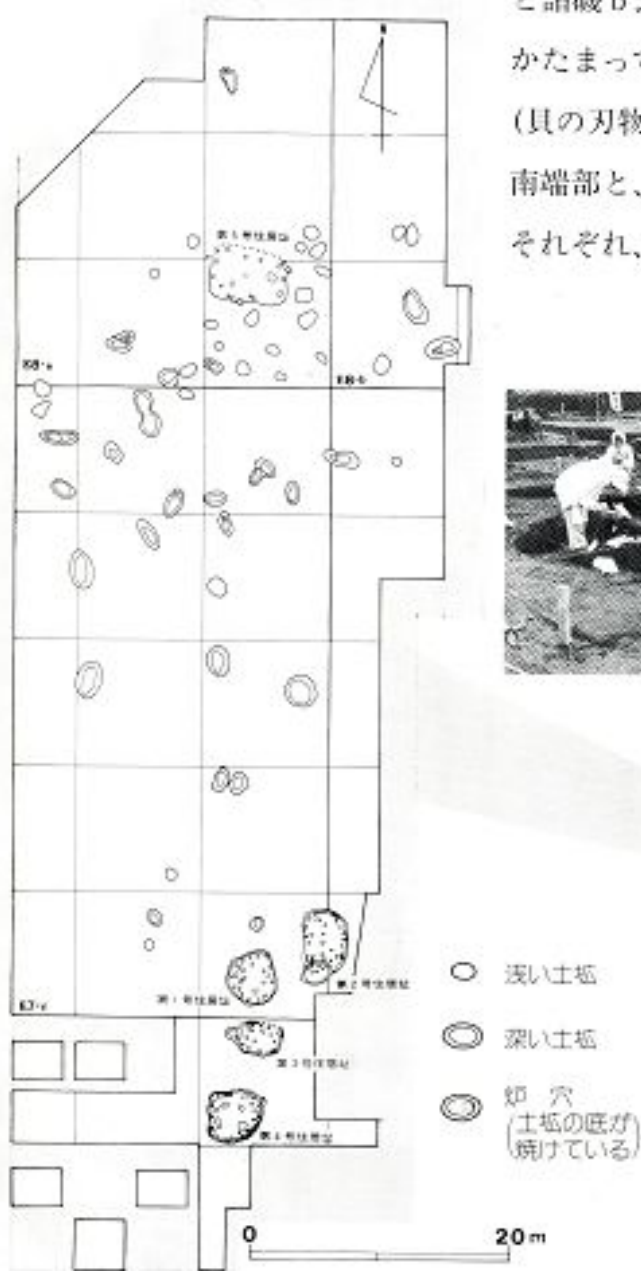
矢の先につける石の矢
じり。シカなどの狩り
に使われたのだでしょう。



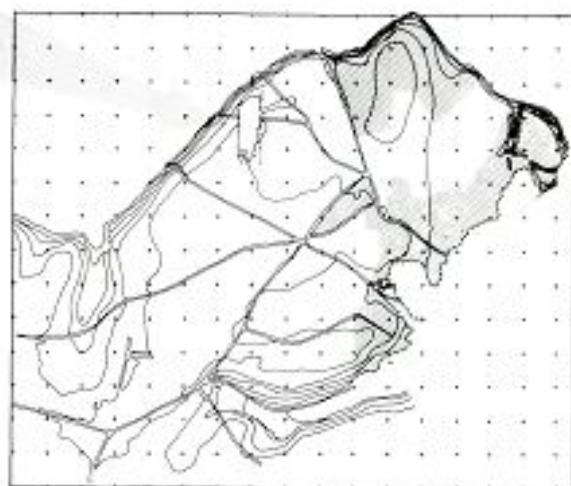
これまでの縄文時代確認調査結果

これまでの確認調査の結果、かなり広範囲にわたって縄文時代各時期の遺物と遺構が確認されました。そして、遺構の確認された所はほぼ遺物の集中している地区とかさなる結果がえられています。さて、各時期の土器分布図を参照してください。調査区北端のやや西よりのかなり広い地区には、早期から中期初頭にかけての土器が集中しています。この地区では、竪穴住居址や土塚がかなりの密度で確認されています。昨年度、工事用道路になるところを調査したところ（下図参照）、たくさんの土塚と5軒の竪穴住居址を検出することができました。第5号住居址は炉を設けており、鶴ヶ島台式土器を伴出しています。第1号～第4号住居址は前期後半にあたります。特に、第1号住居址からは浮島Ⅲ式土器と諸磯Ⅱ式土器がいっしょに出土し、さらに床面上に貝がかたまって出土したところからは、貝輪（貝製腕輪）、貝刃（貝の刃物）が検出されています。また、小谷津を前にした南端部と、北東部にある加曾利E式土器の集中地区では、それぞれ、3軒の竪穴住居址が確認されています。

（川端弘士）



発掘調査風景（左・住居址：右・土塚）





3. 弥生・古墳・奈良・平安時代のようす

和良比道跡では、縄文時代に続く弥生時代・古墳時代・奈良・平安時代の生活の跡は見つかりませんでした。ここではその時代の様子を見てみましょう。

縄文時代から弥生時代への移り変りは、狩りや採集を中心としていた生活から、農業を中心とする生活へと激しく変化していった時代です。この生活の変化は人々の社会の仕組みを大きく変えていきました。

縄文時代	B.C. 300	水稲耕作が始まる
弥生時代	A.D. 0	ムラから小さなクニができていく
	100	30くらいのクニにまとまる
	200	各地で古墳がつくられるようになる
古墳時代	300	大和朝廷の統一進む
	400	
	500	
	600	593 聖徳太子 摂政となる
奈良時代	700	645 大化の改新
		710 みやこを平城京(今の奈良)にうつす
平安時代		741 国分寺・国分尼寺の 置
	800	794 みやこを平安京(京都)にうつす
時	900	摂関政治が始まる
	1000	武士が台頭してくる
		藤原氏が全盛期をむかえる
代	1100	1086 白河上皇 院政を始める
		1192 源 頼朝 征夷大将軍となる

▽ 弥生時代
木製農具や土器が
多く使われていました。



△ 石臼で穂を刈り
とります。



△ 多くの民衆が古墳をつくる
ため、使われました。



▽ コメはむしって食べました。

▽ 荘園の耕作
地方の農民にも鉄製農具が
ゆきわたり、耕地にウシや
ウマが使われました。



(飯沼弘子)

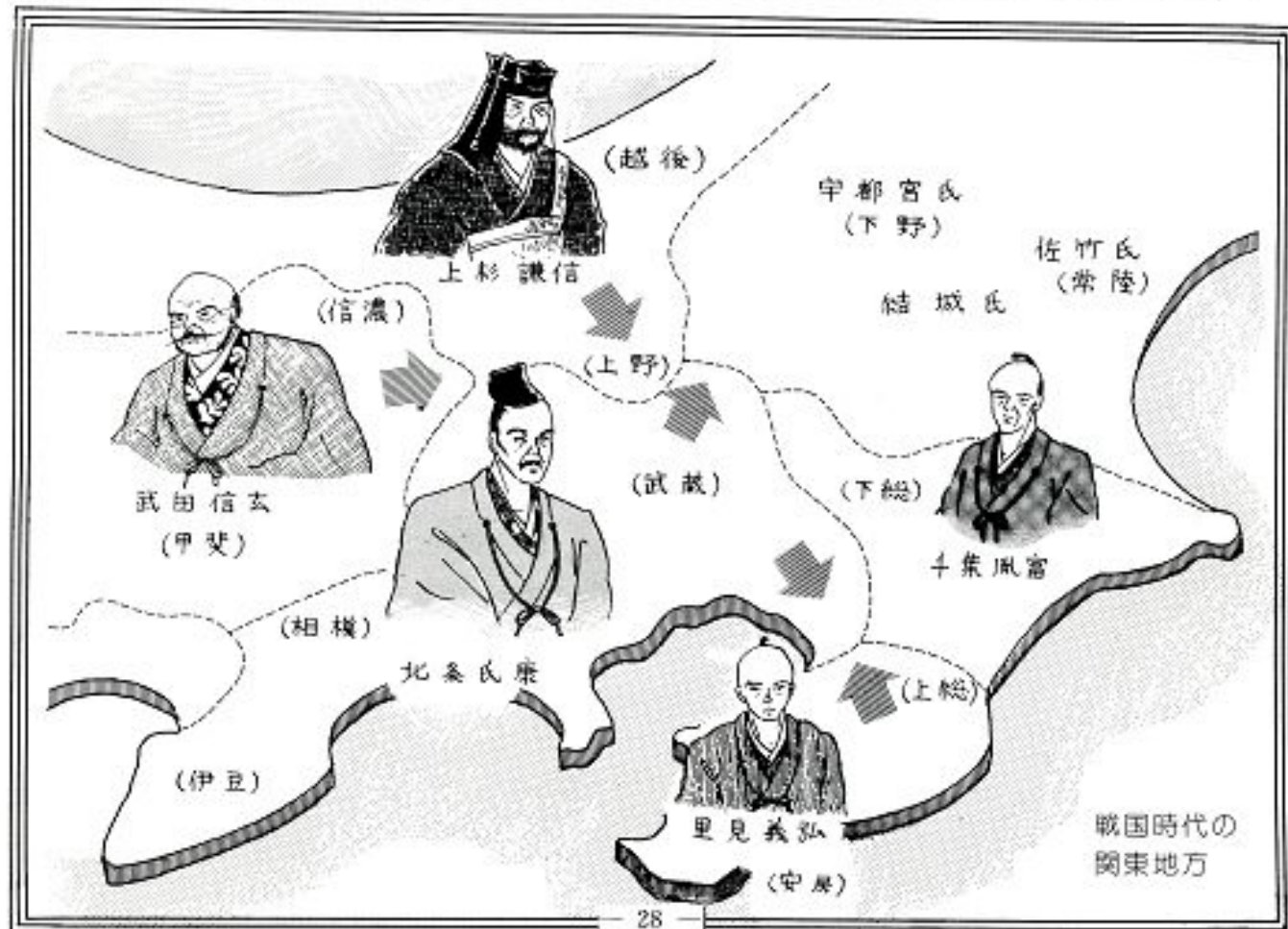


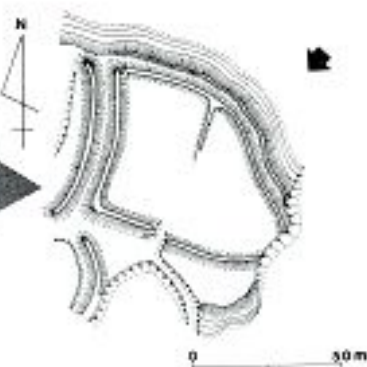
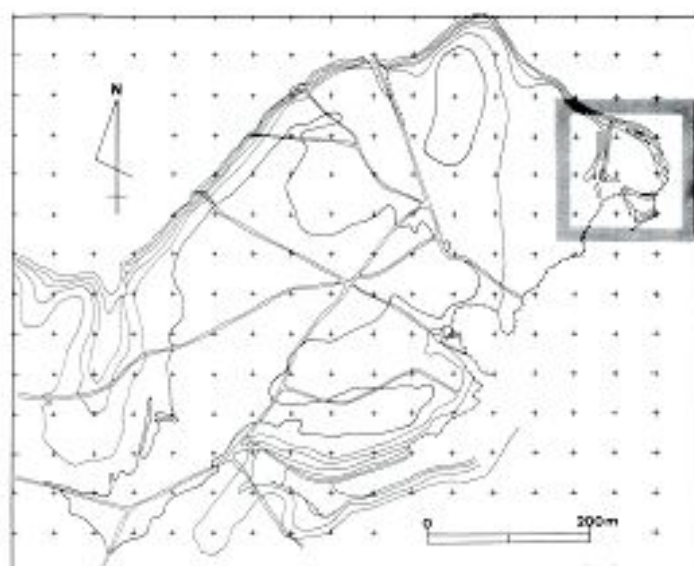
4. 中世の和良比

和良比には中世に築かれた「堀込城」と呼ばれる城跡があります。城とはいっても、有名な姫路城や大阪城のような天守閣や石垣などは最初からなく、空堀を掘り、土を盛り上げてつくられた城ですが、中世における大変貴重な遺構です。そこで中世の歴史と堀込城の関係について考えてみましょう。

平安時代の中頃から日本では武士が発生し、次第に力を持つようになりました。下総の国（千葉県北部及び茨城県西南部）では、千葉氏とその家臣たちが勢力を持ち、鎌倉時代には名門として栄えましたが、室町時代、戦国時代と時代が下るにつれて内部分裂や他の戦国大名の侵略によって衰えていきました。中でも後北条氏は、小田原城（神奈川県小田原市）を本城として関東征服をめざし、千葉氏とその家臣を少しずつ支配していきました。

後北条氏は、北条早雲に始まり、氏綱・氏康・氏政・氏直と続きますが、その間つねに勢力を拡大し、城も無数につくりました。そして、四代目の氏政の頃には、二百数十万石の大大名になったのです。しかしながら、関東地方を中心にその強さを誇った後北条氏も、天下統一をめざす豊臣秀吉によって天正十八年（1590年）に滅ぼされ、千葉氏も後北条氏と運命を共にしました。かわって徳川家康が関東に移封（今でいう地位を下げられ転勤になったこと）さ





堀込城の縄張り図

堀込城を北側からみた図



れましたが、このとき千葉県内の大部分の城は廃城となり、二度と使われることはありませんでした。

堀込城は、歴史的な事については何ひとつわかっていませんが、土塁の形式（土塁を二重に築いて防備を嚴重にしてあること）や、千葉氏とその重臣原氏の本城（千葉氏：猪鼻城 ↔ 本佐倉城、原氏：白井城 ↔ 生実城）との位置関係などから考えて、千葉氏あるいはその家臣の城であった可能性があります。いずれにしても今後発掘調査が行われるにしたがって、いろいろなことが明らかになるでしょう。

（秋庭行雄）



堀込城と主な中世城郭



和良比では中世の遺物として内耳鍋が出土しています。内耳鍋はひもを通すための目を内側につけてひもが燃えないように工夫されていました。



IV 発掘調査のやり方



よく新聞などで報じられる発掘調査のニュースを見て、こうした調査に関心をお持ちの方も多いと思われます。ここでは、そうした調査がどのように行われるのか、和良比遺跡での調査の写真とともにご紹介いたしましょう。

発掘調査の目的は、その土地に、いつごろ、どんな人たちが、どのような生活をしてきたのかをはっきりさせることにあります。こうした目的をはたすために、発掘調査には野外作業（遺跡で行われる発掘作業）と室内作業（室内で行われる整理作業）があります。

私たちの足もとには、はるか昔からの情報がたくさんつまっています。人々が喜び悲しんだ舞台である地面が、いくつもの時代にわたって古いものから順に層をなして埋まっているのです。当時の人が穴を掘って家をつくり、その中においておいた土器を、現代の我々が調査でとり上げてしまうことは、土器のおかれた時から保たれてきたその時代の生の情報がこわされてしまったこととなります。遺跡の調査は、同時に遺跡の破壊なのです。完全に破壊される前に調査によって知ることのできた情報を後にのこすために、野外作業はつねに慎重に行われ、写真と図面によって細かく現状を記録していきます。

こうして出土した資料は室内に運ばれ、整理・分類をされます。どのような道具が使われ、それはどのように作られたか、どのような文様が土器につけられたか、また逆にその文様からその土器はいつのものなのか——このような細かいことが室内作業でわかってきます。

また、よりよい調査のために学習会がもたれたり、地域の人々にも「調査とはこういうものだ」ということを理解していただくために現地説明会も開かれます。さらに、こうした発掘調査についてもっとお知りになりたい方は、32ページにあげてある本をお読みになるとよいでしょう。

(小出結花)



発掘調査事務所での学習会



現地説明会（昭和58年11月20日）